

擗木

てに御覽ましくけるが此寺へもおもほへず渡御ありしに折ふし其時の住僧はや八旬に及て、庭に出てみつわくみつ、手づから接木して居けるが、御供の人々おぐれ奉りて、御側に二人三人つき奉りしを中々やんごとなき御事をば思ひよらねば、そのまゝ背き居たりしを房主なに事するぞと仰られしを老僧心にあやしと思ひて、いとはしたなく、接木するよと御いらへ申せしかば、御わらひありて、老僧が年にて、今接木したりとも、其木の大きくなるまでの命を忘れがたし、それにさやうに心をつくす事ふようなるぞと上意ありしかば、老僧、御身は誰人なれば、かく心なき事をきこゆるものかな、よくおもふて見給へ、今此木どもつぎておきなば、後住の代に至て、いづれも大きくなりぬべし、然らば林もえげり寺も黒みなんと、我は寺の爲をおもふてする事なり、あながちに我一代に限るべき事かはといひしをきこしめして、老僧が申こそ實も理なれと御感ありけり、その程に御供の人々おひく來りつゝ、御紋の御物ども多くつどひしがば、老僧それに心得て、大きにおそれて奥へにげ入しを、御めしありて、物など賜りけるとなん、

〔松屋筆記五十一〕杉のさし木の傳

中陵漫錄四の卷插杉條に、杉は插木にしたるは皮目の處少シ白く、其内は皆赤身也、薩州にては毎年四月の比、杉の枝を二尺許に切取り、六本を二把として、山中の泉に浸し置事四五日、取上で赤土の泥中に塗て、山野の空地に杖を立て穴を爲し、深さ七八寸に至る、尤地の堅き處は穿つ事なし、此穴中に挿む、風吹時は迴轉す、雨露の潤を歴て自ラ堅定する也、大抵百本の内七八十本活、是より手附るに及ばず、土地の宜き所には尤長じ易し、先春に至てその木の素情を見立、葉の先新葉を出さんとするを俗にあう、採て挿時は、百に一失なし、苗を仕立植るに勝れり云々、與清曰、擗木は今年延の若枝^{ハサキ}を挿には、葉莖かたまりてさす、長さ二三寸、或は四五寸にし、葉おほければ切捨て、その本をよく切て、赤土の中に黄色なるを探て、煉て丸くして、それに挿てさて植る也、これを